博士学位論文審査報告

論文題目：

『中国東北地域における戦前の都市計画及び戦後の都市再建の研究―長春市を中心に―』

学位申請者：矢羽田朋子

矢羽田朋子『中国東北地域における戦前の都市計画及び戦後の都市再建の研究―長春市を中心に―』は序論から始まり全５章、第Ⅰ部は第１章から第３章まで、第Ⅱ部は第４章と第５章、最後に「結論」で本論を結び、今後の課題を述べて全体を括っている。以下、各章ごとに順を追って内容を紹介し、そのあとに総合的評価を述べる。

【論文の概要】

序論

矢羽田朋子氏（以下、「筆者」とする）は本論執筆の動機について序論第二節で、「2004年８月から2005年６月まで吉林大学への派遣留学生として在籍していた」折り、「満洲時代に建てられた」「大通りの建物の形及びその配置に違和感を覚えた」ことから始まり、また長春駅を起点として放射状に広がる道路網にも関心を示し、「中国東北地域、とくに戦前「満洲」と呼ばれていた地域の都市建築及び都市文化活動について」の研究を志したと述べている。

序論の「分析の視点」では、第一節で「満洲国建国までの概観を述べ、建国以前の中国東北地域がどのような状況であったのか歴史的事実に即しながらみて」いきたいと述べており、筆者独自の工夫で満洲国時代の人口の推移と領土面の拡大を確かな資料に基づいて分析している。「満洲国建国までの概観」では、日清戦争に始まり、日露戦争及びポーツマス会議、張作霖爆殺事件、柳条湖事件を経て、満洲事変に到る経緯について述べ、その結果1932年３月に傀儡国家である満洲国が成立したことを概括している。

また満洲国の人口と面積について、山中峰雄氏の人口統計を参考にして、『満洲年鑑』を用いて適宜修正を行い、表を作成している。これにより、1932年から1942年にかけて新京の人口増加が確実に進んでいるのが見て取れる。これは新京が国都としての機能が年を追うごとに充実していき、各種の開発が本格的に始まったことで労働者が流入した為であると筆者は指摘している。

第Ⅰ部　日本による統治（実質的植民地）時代の都市計画

第1章　満鉄と中国東北地域の都市の形成の関係について

この章では満洲国以前の満鉄による都市計画、とくに初代満鉄総裁・後藤新平の理念を

取り上げ、それがどのように都市計画に生かされていったかを考察している。筆者は満鉄付属地を中心とする都市計画には後藤新平の「文装的武備」と称する理念が反映されていることなどを指摘している。一方で満鉄付属地に対して清国が外国人居留地に指定した「商埠地」についても触れている。

第２章　満洲国期の長春―国都建設計画について

第２章では、長春が国都として選定された理由、国都建設計画について、および建国大学の概要の三点について述べている。特に筆者独自の視点が見られるのは、長春に国都を設定する上で臧式毅という人物が果たした役割について考察している部分である。臧式毅は張作霖の有能な部下であったが、満洲事変後に関東軍に拘束され、日本に協力するようになった人物である。筆者は史料に基づきながら、臧式毅の言動が国都選定に一定の影響を与えていたことを論証している。また「満洲の最高学府」である建国大学に関しては、おもにその建設過程に焦点を当てることで、建国当時の慌しさと関東軍優位の都市計画の一端を示している。

第３章　国都の建築と建築様式について―都市のハードウェア的側面―

この章は筆者の本領とする満洲の官衙建築について論ぜられている。特に国都建設局主任の相賀兼介に注目し、相賀を中心に満洲国国都の主要な建築が設計されたことを述べている。

官衙建築の統一様式については、「帝冠式」、「興亜式」ないしは「満洲式」といった定義の相違があったことを指摘したうえ、筆者は「満洲式」とする説に同意を示している。そしてその建築様式は満人に対する一種の懐柔策として利用された、またそこには「盟主主義」が見られるというのが筆者の主張である。

第Ⅱ部　人民共和国へ（都市計画の推移と移行）

第４章　日本敗戦と国共内戦期の中国東北地域について（第三次国内革命戦争 1946－1949）

第４章、第５章が含まれる第Ⅱ部では、日本敗戦すなわち満洲国崩壊後、国共内戦期および新中国建設期において旧満洲国の都市はどのように変遷していったかというテーマが扱われる。

第４章では、1978 年時点での中国側専門家の認識が、日本敗戦後の旧満洲は国民党により「都市が破壊された」とされていることに疑問を呈し、国民党の満洲国接収を再評価しようとしている。その際、終戦直前のソ連軍流入に注目し、詳細にソ連軍の動向を追いながら、ソ連軍が大規模に生産財や備蓄品を搬出し、のちの国民党との交渉に備えた事実を指摘し、国民党による意図的な破壊工作ではなかったことを論証している。また、内戦期

の東北地域は国民党、共産党、ソ連という三勢力の角逐の場であったと結んでいる。

第５章　復興期（1949－1952）及び第１次５カ年計画期（1953－1957）の中国東北地域の都市再建について

第５章においては、人民共和国期のうち特に復興期から第１次五か年計画（1953-1957）の時期をとりあげて、中国共産党主導による東北地域都市建設の考察を行っている。中国共産党が「消費都市を生産都市に変える」方針を打ち出し、東北地域における都市の生産力の向上は第１次５か年計画においても重要な要素となった。その中で長春においては、ほとんどすべての業種にわたる私営企業、および不動産を所有する個人が「公私合営」へ「自己申請」するという形で社会主義改造が進んでいったことを述べている。順調に改造が進んだ背景として、旧満洲国の首都であったことや、新しい都市であったゆえに有力な地元資本が少なかったことを指摘している。

結論

結論部分ではまずこの論文の目的について改めてまとめているが、そこで筆者は、「「都市」の一面を切り出していく中で「都市」の構造や仕組みについて理解していくことを本論では目指した」と述べている。

本論で扱った長春をはじめとする中国東北地域の都市については、「ロシアと日本による影響が多分にあらわれている」とする。また、戦前においては「満洲国建国前と満洲国建国後では、その都市に与えられた性格が大きく異なって」いるとし、戦後には「戦前に培われてきた工業面の蓄積を糧として、中国の一つの都市として再建されていった」という特徴があると述べている。

また、結論の後半では「現存する満洲国時代の建築物の利用について」という一節を特に設け、旧満洲国の建築物が現在までどのように利用され、また調査研究されているかについて概説している。

【評価】

１．研究の独自性

以上概観したように、矢羽田氏の論文は満洲国ないしは中国東北地区を「都市」という切り口から歴史的にとらえようとした試みといえる。筆者本人も述べているように、「満洲国時期」や「新中国建設期」等のように時期区分される研究は多く存在するものの、都市の変遷を通史的に捉えようとした研究は比較的少なく、本論文のテーマ設定には独自性が

あるものと思われる。

個別の箇所について見ると、第２章の国都決定における臧式毅の役割に関する考察、同じく第２章の建国大学の設置に関する考察、第３章の官衙建築様式に関する考察、第４章の日本敗戦直後のソ連軍、国民党軍の破壊行為に関する考察などに筆者独自の見解が見られる。

また、第５章末尾において現在長春市に残る満洲時代の建築物を多くの写真によって紹介していることもこの論文の特徴といえる。

２．先行研究への言及

序論および第１章から第５章までのすべてにおいて、全面的に先行研究は意識されている。その中には日本語文献と中国語文献が両方含まれ、また時代的にも古いものから新しいものまでまんべんなく含まれるなど、広く参考文献を渉猟していることが、脚注として記載される大量の注釈からも見て取れる。

３．論文全体の構成

論文全体の構成については、ややアンバランスな印象が残る。まず序論の部分で満洲国建国前後の歴史的背景が詳述されているが、ここはあくまで序論なので、このような詳細な論述は違和感がある。序論にあまりにも精力をつぎ込んだために本論で息切れをしている感がある。本来は第３章の建築様式に関する論述が興味深いテーマであり、筆者独自の視点が見られる箇所だと思えるが、相賀兼介に言及した程度で終わってしまい、掘り下げが不十分であることは残念である。

第Ⅱ部において第二次大戦終結後から人民共和国時代を取り上げたことはこの論文の一つの特長であると言える。しかしながら、この論文の目的が「「都市」の構造や仕組みについて理解していく」（結論）ということであるなら、人民共和国時代にその「都市」そのものの本質はどうなったのか、という点をもっと注意深く掘り下げるべきであろう。核心テーマがⅠ、Ⅱ部を通じて貫かれていないために、第Ⅱ部の存在意義がわかりにくくなっている。

４．総合的評価

以上のように、構成や表現面にまだ課題が見られるものの、全体としては高い研究水準が認められ、また研究対象に対する矢羽田氏の精力的な研究活動が感じとれる論文である。また、同分野のこれまでの研究業績と比較しても、類似研究が少ないユニークな博士論文となっている。

以上の評価により、本論文が博士学位を授与するに価する研究成果であることを、審査員一同承認した。矢羽田氏の今後のさらなる研究の進展が期待される。

2017年　2月25日

博士論文審査委員会

主査　新谷秀明

副査　邊土名朝邦

副査　中島和男